

特集

産婦人科漢方医学 —基礎と臨床のエビデンス—

企画者のことば

松村謙臣^{*1} 甲斐 冴^{*1} 武田 卓^{*2}

皆さんは漢方薬を使っておられるでしょうか？ 漢方医学は5世紀のはじめに中国医学が日本に伝わったことから始まり、その後、日本国内で独自に発展しました。漢方薬は自然界にある植物、動物、鉱物由来の生薬を組み合わせたものです。どの生薬をどのくらい組み合わせるとどういった効果が得られ、どのような毒性が認められるかは、長い年月をかけて行われた治療によって経験的に確かめられ、漢方処方として作り上げられてきました。現在では、健康保険が適用される医療用漢方製剤として、148処方薬が薬価収載されています。

産婦人科領域でも、月経前、更年期、妊娠中、手術後、化学療法後などにおける女性の心身の不調に対し、漢方薬は非常に有効です。しかし西洋医学を学び、医師免許を取得して産婦人科医になった皆さんの多くは、漢方薬は作用メカ

ニズムや臨床のエビデンスもよくわからず、不安で使いにくいというイメージをもたれているのではないかと思います。

最近、分子的な解析や動物実験によって、漢方薬の作用メカニズムを明らかにしようとする基礎研究が行われるようになり、漢方薬を西洋医学の体系から理解することができるようになってきました。また、臨床でのエビデンスが蓄積され、西洋医学的な診断をもとに処方を行うことで確かに効果を発揮する漢方もあります。そこで本特集号では、産婦人科漢方の基礎と臨床のエビデンスについて、この分野のエキスパートの先生方に執筆していただきました。産婦人科医の皆さんが抵抗なく漢方薬を処方して患者さんのQOL向上につながる医療を実践するために、本誌が貢献できれば幸甚です。

^{*1}Noriomi Matsumura, Sayaka Kai 近畿大学医学部産科婦人科学講座

^{*2}Takashi Takeda 近畿大学東洋医学研究所